

カハナモク

江守 一郎

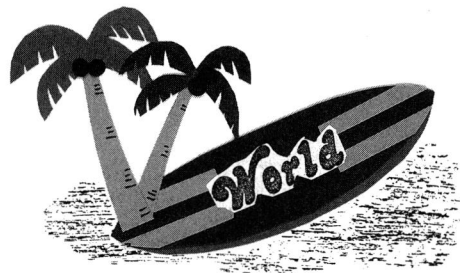
成蹊大学名誉教授

カハナモクといっても、何のことか分からない方が多いだろう。ワイキキのクヒオビーチで大きなサーフボードを背にして立っている銅像の人、これがデューク・カハナモクなのだ。私がカハナモクの名前を知ったのは、もうかれこれ20年近く前、年甲斐もなくワイキキでサーフィンをはじめた頃である。ハワイでサーフィンをやってみると、子供の頃片瀬の海岸でやっていた波乗りとは比較にならないほど面白い。一度やみつきになると、毎年夏になるのが待ち遠しく、ひと月余りもワイキキビーチでサーフィンをしていた。ビーチボーイや地元のサーファーと友達になったが、その中にトム・ネコタがいた。トムは、東京オリンピックのバレーボールで活躍した猫田選手の従兄で、ハワイで生まれワイキキで育った、サーフィンの申し子のような男である。最初カハナモクのことをいろいろ話してくれたのはトムであった。トムが小学校の頃、カハナモクはすでに50歳くらいであったが、ときどきビーチに現われ、サーフィンをしていたという。

私が毎年借りるハワイのコンドミニアムの隣りに、ジョー・ブレナンという男が住んでいる。私はジョーからカハナモクの話をもっと詳しく聞くことができた。彼はカハナモクの伝記を何冊か出版している。伝記を書くにあたって、カハナモクと長い間つきあったが、すぐ居眠りを始めるので起こすのが大変だったと述懐していた。ジョー自身も若い頃は水泳の選手として鳴らし、その後プロのボクサーに転じた後、今では作家生活をしているという変り種である。

ワイキキのビーチボーイであったカハナモクは、1912年のストックホルムオリンピックの100m自由形で金メダルを獲得した。その頃アメリカの代表選手はホワイトオンリーの時代であるから、カハナモクのようなハワイアンを選抜したのは彼が余程速かったからであろう。1916年

のオリンピックは第一次世界大戦で中止、1920年のアントワープオリンピックでは再び100m自由形で金メダル。1924年に行われたパリオリンピックの時、再びアメリカの代表選手に選ばれたが、惜しくも100m自由形で銀に終わっている。その時金メダルを獲得したのは、ジョン・ワイズミュラー、後にハリウッド映画で活躍したターザンである。1932年のロサンゼルスオリンピック選考会では、残念ながら水泳は予選落ちしたが、水球メンバーとしてオリンピックに出場し、銀メダルを獲得したのである。時にカハナモクは43歳だった。



このようにカハナモクの水泳歴は輝かしいものであるが、何といても皆が憧れたカハナモクの魅力は彼のサーフィンである。オーストラリアにサーフィンを最初に紹介したのもカハナモクだった。彼は自分で作ったサーフボードをかついでオーストラリアに行き、デモンストラーションをしたのである。サーフィンに関する逸話には事欠かない。1917年の夏、ハワイにかつてない大波が押し寄せた。ダイヤモンドヘッドの沖で盛り上がる波は優に50フィート(17m)を超えていた。その大波に乗ったカハナモクが、海岸に来るまで3km近く。彼がビーチに帰ってきた時、見物をしていた沢山の人から猛烈な拍手が湧いたということである。

カハナモクに直接会ったトムやジョーを通じて、カハナモクは私にとって神話ではなく身近に感じることのできるサーファーである。